

知識探訪

多民族社会の横顔を読む

協力：日本マレーシア学会 (JAMS)

エンダウ収容所—日本人抑留者の文集『噴焔』が問いかけるもの

山本博之（京都大学東南アジア地域研究研究所・准教授）



旧エンダウ作業隊の開拓地は今日では水田になっている（2024年5月、筆者撮影）

日本では8月15日が終戦の日として広く認識されているが、1945年8月15日を境に戦時中から戦後に一斉に切り替わったわけではない。英国は日本軍人を抑留して戦後の復興事業に使い、マレーシア（当時はマラヤ）でもエンダウ収容所で強制労働を課した。

エンダウはジョホール州の東海岸に位置する広大な湿地帯だった。39年に英国植民地政府が食糧増産のため水田化を試みたが、失敗して開拓事業を放棄した。戦争中にマラヤとシンガポールを占領統治した日本は43年、食糧問題の解消のためシンガポールの中華系住民をエンダウに移住させる開拓計画を進めた。しかし、入植者には米作の知識がなく、戦争が終わるとシンガポールに戻った。

戦後、英国植民地政府は食糧問題解決のためエンダウ開拓事業を計画した。46年4月に日本人抑留者から成る作業隊を送り込み、47年5月までに3,000～5,000人が労役に服した。酷暑の中、湿地を切り拓き、かんがい設備を作って荒れ地を水田にすることが主な作業内容だった。

食糧の配給は極端に少なく、作業地で休憩中に食べ物を探した。地元の行商人が物々交換に来て、わずかな衣服が1枚ずつ剥がされるように食べ物とたばこに替えられた。交換できる物がなくなると畑を作って芋を植えた。作業地で拾った木片でげたを作り、町で食べ物やたばこに替える人もいた。

作業隊では俳句や短歌の同好会が作られた。乾パンの包装紙を小さく切ってとじた句帳を作り、短い鉛筆と一緒にふんどしのひもに下げて作業に出た。休憩中に思い浮かんだ句や歌を書き、夜は宿舎で薄暗いヤシ油の明かりを囲んで句会を開いた。

俳句や短歌を発表する演芸会が行われ、そのうちにニッパヤシでふいた舞台が建てられて演劇も行われるようになった。作業の合間に稽古を重ねて、作業隊同士で競うように演劇が披露された。近隣地域の人たちも子連れで観劇に来た。

作業隊員の文芸作品を集めた文集を作ることになり、47年3月に『噴焔』が刊行された。表紙には手すきの紙が使われ、作業隊が開拓した水田で育った稲の穂が織り込まれた。ただ、刊行直後に抑留者の帰還が始まり、『噴焔』の刊行はこの1号限りとなった。

エンダウ収容所は47年5月に閉鎖された。日本人抑留者は、戦争中に日本が計画した開拓事業が対象とした2,715エーカー（約11平方キロメートル）の作業を行い、1年間で1,616エーカーの伐採、焼却、清掃を終え、そのうち1,238エーカーの耕作と植え付けを完了した。1,099エーカーは耕作に至らず、それと別に7,285エーカーが人跡未踏の原始林として残っていた。

『噴焔』は、その全てを開拓するには今後50年の歳月と延べ5,400万人の労働力が必要になると記している。

『噴焔』の記事から浮かび上がるのは、戦争が終わって多くの日本軍人が帰国し、故郷の家族や友人と再会を果たし、祖国再建に取り組んでいる時、なぜ自分は故郷から遠く離れたこの地に留め置かれ、自由を奪われて飢餓と重労働に耐えなければならないのか、そして、もしこの状態に積極的な意味があるとするならば、どのような意味なのか、という抑留者たちの問いである。

『噴焔』はこれらの問いを、抑留した英国人ではなく同胞である日本人に時を越えて問いかけている。

< 筆者紹介 >

1966年、千葉県生まれ。東京大学大学院総合文化研究科修了。学術博士。マレーシア・サバ大学講師などを経て現職。専門はマレーシア地域研究。研究関心はサバ州の政治文化、ジャウィ雑誌の社会的役割、災害時の社会再編、演劇・映画と物語文化圏、南方抑留など。編著書に『マレーシア映画の母 ヤスミン・アフマドの世界』（英明企画編集、2019年7月）がある。抑留文集『噴焔』の復刻版の刊行準備中。日本マレーシア学会（JAMS）会長。